

---

# 雨音の行方

はしもと なおや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨音の行方

### 【Nコード】

N8183Q

### 【作者名】

はしもと なおや

### 【あらすじ】

雨宿りをしている喫煙所で君に出会う。

雨。

J R 町田駅の改札を抜ける。歩く速度とともに心拍数が高鳴っている。

僕は雨が好きだ。心にしみ入り、僕の隙間を埋めてくれるようで。雨のせいでやけに感傷的になる瞬間も好き。僕が雨と一体になっている感覚。

そんなことを考えながら君との待ち合わせ場所へ急ぐ。とりあえず高校時代の彼女が好きだったロクシタンの匂いを漂わせるルミネを横目に見ながら北口を出る。そして、楕円形：と言えいいのだろうつか、とにかく何を表しているのか分からない回るオブジェの前を通り過ぎる。このオブジェ前は待ち合わせの定番の場所でこんなに雨が降っているにも関わらず意外と人がいるらしい。それぞれにそれぞれの理由があって待っているんだよな、と雨によって感傷的になったせいと思う。あの金髪でキャバ嬢みたいに派手な女の人は彼氏を待っている、あっちのおばあさんは孫かな、この相当盛り上がっている集団は合コンかなにか、など雰囲気から想像する。みんな理由は違えど特別な思いを抱えている。

強く雨が降っている。アウトドアのバックパックから折り畳み傘を取り出そうと立ち止まる。

僕も君を待たせている。どんな気持ちで待ってくれているのだろうか。相当怒っているのではないかと少し心配になる。そういえば君と初めて会ったのもこんな雨だった。もしかしたら、君は誰かを待っていたのかもしれない

\*

僕は傘を忘れて雨宿りのために喫煙所に駆け込んだ。僕は煙草なん

て大嫌いだった。バカ高くて吸っても自分の体を壊すだけ、なんて本当に意味がない。なにより匂いが嫌いだった。まだ幼稚園に通っている頃、ヘビースモーカーの父に憧れ火のついていない煙草を吸ってみたが、あまりにまずくて泣いてしまったという思いでしか残っていない。それが原因ではないだろうが煙草は吸わないと決めている。

けれど雨宿りのため、しょうがなく喫煙所に入った。遠くから見るときは誰もいないだろうと思った。でも片隅に、ぼつん、と一人だけ足を組んで座っている女性がいた。細くて、顔つきが凜としたひと。煙草を吸っていたので僕は少し距離をとって座った。その煙草を吸っていたのが君だった。

君の細くて長い指が僕の大嫌いなはずの煙草をなぜかかつこよく見せた。君が煙を吐き出すたびに見せるミステリアスに俯くしぐさ、ひたすらに落ちてくる雨に煙りが混じっていくを見つめる眼差し。このひとも雨が好きなんだろうな、と根拠のない確信が一分もしないうちに持っていた。なんとなく、だ。なんとなく僕と同じ目をしていると思った。

降りしきる雨。どうせにわか雨だろう。弱まったらコンビニに行つて傘を買おう。傘で五百円はきついな。でもこの雨じゃしょうがない。雨の日は眠くもなる。これは動物としての本能らしい。無駄に疲れる。そんな雨。

ふと、君の横顔を見る。

なぜ、なんでこのひとはこんなに悲しそうな顔をしているのだろうか、そう思った。雨の音が僕を洗脳するかのように頭に響いてくる。僕は君の横顔から空へと視線を移した。

「雨だ。」

君の声は雨の音と混じり合って聞き取れなかった。まだ悲しそうな顔をしている君の顔に目を向ける。

「ふふ。」

僕は驚いた。君が笑ったことではなく、悲しそうな顔のまま笑う

ことに。しかも、ばかにしたように鼻で笑う。僕は声にならないような（え）というような声をあげていた。

「ううん、雨音って悲しくなるよねって。」

「悲しく、ですか。」

「なんとなく。」

僕はそこで黙り込んでしまった。なんとなく、か。僕もなんとなくはわかる。でも言葉で言い表せないから口を開けない。とりあえ「はい」とだけ言って、また雨の落ちてくる空を見上げた。雨は少しだけだけど弱まっていた。この調子ならもう少しだけ待てば止むかもしれない。

「傘、忘れちゃってさ。」

君はベンチの端から少し近づいてきていた。煙草の煙が嫌だ、と僕は少し引いてしまった。

でも、そういえば傘が見当たらない。だからここにいたのかと、やっと気付いた。僕もいつもなら折り畳み傘をアウトドアのバックパックの中に入れてるのに前日に違うカバンに入れたから忘れてしまった。

「すごい…すごい雨ですね。」

僕の顔はひきつっていた。君は僕がこの喫煙所に入ってきて2本目の煙草に火をつけていた。ジッポでつけてるのがカッコいい。歳はいくつぐらいだろうか。二十歳の僕と同じくらいにも見えるけど煙草を吸ってるせいか大人びて感じる。

「煙草は？」

「いや、まあ。」

煙草を吸えないのに喫煙所へ入ってきたのを後悔した。いつそのこと、その自販機で煙草でも買ってみようかと思うくらいだ。もう二十歳だし問題はないはず。いやタスポがない…僕は焦る。

「え、何？」

君は肺にある煙草の煙を全て出すようにふーっ、と吐き出した。少しいらだって見えた。

「あ、いや：はい。」

「だから、何？」

僕は少しびっくりして

「あ、えっと、吸えなくて。雨宿りでここに来たんです。すいませ  
ん。」

なぜだか謝っていた。

「ああ、ごめん、ごめん。」

そう言うと君は灰皿にまだ火をつけたばかりの煙草を押しつけた。  
ジュっという音が響いた。

気がつくとも雨はずいぶん小ぶりになっていた。そのせいか歩く人  
も増えていつの間にか喫煙所には人が増えていた。煙草を吸うおじ  
さんたちをみてこっちが入ってきたのが悪いんだよな、と冷静に考  
える。

「私、雨好きなんだよね。」

「はい。」

なにか気のきいた言葉でも出せればかつこよかったのだけとできな  
かった。しばらく沈黙が続いて気まづくなった。雨はほとんど止ん  
でいても傘もいらなくらいだ。

「いつしよにどっかいかない？」

僕が今さっき妄想していた言葉が君から出た。雨の音が聞こえなく  
なった代わりに僕の鼓動の音が速まっているのが分かる。

どこにいくでもなく街をぶらぶらしていた。相変わらず僕はどう  
していいかわからず君の話に無愛想な相槌を打つだけだった。でも、  
君は雨についていろいろ話してくれた。雨の日を好むひとと嫌う  
ひとがいるけど自分は好きだということ。音とか匂いとか、空気と  
か。それと昔の恋人と箱根にドライブをしにいったときにいきなり  
の雨で最悪だったということ。でも、帰り道にきれいな虹がかつ  
たこと。その恋人との別れた日も雨だったこと。でも梅雨の時期の  
雨は嫌いだとか。あと、雨の日は泣きたくなるって

「煙草を吸いたい」と君が言うのでまた別の喫煙所に入った。小

田急のほうの喫煙所だ。大きな水たまりには肌では感じられないくらい雨粒が波紋を作る。

「僕、こういうの好きですね。雨が止んだっていつか、えっと、なんていうのかな。」

「わかる。」

ぼつり、君が言った。今思うとこんな言葉じゃわかるはずもなかったと思う。けど、奇跡的に伝わったと思い、僕は君を好きになった。

\*

忙しく流れる人波が僕とすれ違ったり、追い越して行ったりしていく。僕は空を覗く。雨はまだ降り続けている。

君が悲しい顔をしていた理由は分からない。でも僕は知らなくてもいいかなと思う。

多分話してくれた昔の恋人のことかとも考えたけれど多分違う。もしかしたら他の人があの日の待ち合わせに来なかったのかもしれない。でも、そんなこと知らなくていい。

僕は君の悲しい顔が好きだ。もちろん笑った顔だって、真面目な顔だって好きだ。全てが好きだ。だから、そういう君がいることを素直に受け入れようと思う。僕にはそれしかできないから。

あの日まで雨の日はどこか憂鬱で心の隙間を広げていくものだと思っただ嫌いだ。ただ、君が好きなら雨だから、君の好きな匂いだから、君の好きな音だから。だから、僕は雨を好きになった。これからもっと好きになるだろう。

ポケットのなかの携帯が震える。

僕は折り畳み傘を広げて喫煙所へ向かう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8183q/>

---

雨音の行方

2011年10月8日18時09分発行